

しょうじ わたる
東海林 渉

学位の種類 博士（教育学）

学記番号 教博 第 199 号

学位授与年月日 平成 30 年 6 月 20 日

学位授与の要件 学位規則第 4 条 1 項該当

研究科・専攻 東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程）
総合教育科学専攻

学位論文題目 糖尿病のセルフケアに関する臨床心理学的研究
ーソーシャル・サポートと家族システム論の視点からー

論文審査委員 (主査)
准教授 安 保 英 勇 教授 上 埜 高 志
准教授 若 島 孔 文

〈論文内容の要旨〉

本論文は、糖尿病のセルフケアに対する臨床心理学的援助についての基礎的知見を集積することを目的に、成人の糖尿病患者とその家族員を対象に、ソーシャル・サポート研究と家族システム論研究の 2 つの視点から、家族のサポートや夫婦双方の食事療法への取り組みが糖尿病の疾患管理やお互いの精神健康に及ぼす影響を検討した。はじめにソーシャル・サポート研究と家族システム論研究の先行研究のレビュー（第 1 章～第 6 章）を行い、以下の 8 つの実証的研究を行った。

ソーシャル・サポートの概念を用いた研究では、糖尿病の疾患管理において家族から得られる疾患特異的サポートと、友人、医療従事者、同病者から得られる疾患特異的サポートを比較しつつ、家族サポートの有用性を検証するため、3 つの研究を行った。研究 1（第 8 章）では、患者の家族サポートのニーズは友人サポートや同病者サポートより高く、医療従事者サポートのニーズよりは低いことを示した。そして、家族サポートには、サポート行動として支援的なものと妨害的なものが混在していることも明らかにした。研究 2（第 9 章）では研究 1 の結果を踏まえ、

家族、友人、医療従事者、同病者からの疾患特異的サポートを測定する糖尿病患者用サポート環境尺度（SED）を作成した。SEDは、十分な信頼性・妥当性を有していた。研究3（第10章）では、SEDを使用して、各サポート源から提供されるサポートが自己効力感、セルフケア行動、そして血糖コントロールにどのように関連しているか検討した。その結果、家族サポートは医療従事者サポートとともに自己効力感を介してセルフケア行動を促す間接効果があること、さらに、家族サポートだけが直接的にセルフケア行動を促進させる効果を持っていることが明らかになった。以上より、家族のサポートは患者を取り巻く人間関係の中でも、特に重要なサポートであることが示された。

続いて、研究4（第11章）では、ソーシャル・サポート研究と家族システム論研究の接点を探る研究として、研究3で得たソーシャル・サポート研究のデータを家族システム論に基づく類型化の視点で分析した。その結果、患者と家族員の食事療法への取り組みは、血糖コントロールを予測するいくつかの類型に分類できることが明らかになった。

さらに、家族システム論研究では、夫婦の食事関連行動を査定する仮説モデルに基づき、各夫婦の食事療法への取り組み方が、疾患管理やお互いの精神健康にどのような影響を及ぼしているか検討するため、4つの研究を行った。研究5（第12章）では、夫婦がどのように食事に取り組んでいるかを基に夫婦を類型化するための食事関連行動評価尺度を作成した。尺度は十分な信頼性と妥当性を有しており、糖尿病を有する夫婦は5類型に分類されることが示された。また研究6（第13章）では、糖尿病を有する夫婦が相手の食事関連行動に対して抱く否定的態度を測定するための尺度を作成し、十分な信頼性と妥当性を有することを検証した。そして研究7（第14章）では、新たに作成したこれらの尺度を用いて、夫婦の類型ごとに、血糖コントロールやQOL、精神健康、夫婦の関係性を比較した。その結果、機能的な類型と機能不全を抱えた類型がそれぞれ特定された。総合的に判断して、患者と配偶者が両者とも食事療法の責任を負い積極的に関与している協同型の夫婦と、配偶者が積極的に食事管理をしている配偶者主導型の夫婦の健康度が高かった。さらに研究8（第15章）では、夫婦の食事に関する具体的な問題構造を検討し、夫婦の問題が「食の好み」、「健康志向」、「食事づくりの手間」の3要素をめぐって発生・維持されるとする「バランスモデル」を提唱した。

これらに加えて本論文では、研究を遂行する中で、性別が食事療法の取り組みに及ぼす影響を検討した。その結果、女性配偶者は男性配偶者よりも食事サポートを提供しやすく、女性患者よりも男性患者は食事サポートを受けやすいことが示された。また、性役割を背景に、女性患者-男性配偶者では関心不足の問題が生じやすいことも明らかになった。一方、過干渉の問題に性別の影響があると断定することはできなかった。

以上、本論文では、糖尿病の疾患管理において家族サポートが重要であるという先行研究と同様の結果が示されたのに加え、新たに、家族サポートの効果は友人、医療従事者、同病者などから提供されるサポートの効果を統制した上でもなお強いことを示した。また、糖尿病を有する夫婦では、協同型の夫婦と配偶者主導型の夫婦が適応的であることが新たに示された。そして、この結果の背景には、食事療法における性役割をめぐるジェンダーの問題が潜在している可能性があることも新たに示唆された。以上の新たな知見を明示したことに加え、本論文は、糖尿病の疾患特異的サポートや糖尿病を有する夫婦の特徴を査定する尺度を新たに整備した点で学問的意義

がある。また、本論文のように糖尿病を抱えた夫婦の取り組みを量的尺度を用いて類型化し、各類型の健康指標を比較した実証研究は国内外において数少なく、本論文の知見はこの研究領域における今後の発展のための基礎的知見になると思われる。

また臨床的示唆として、本論文の知見は、生活習慣の改善が求められる糖尿病患者への家族アプローチの有効性を支持している。本論文の知見から、糖尿病のセルフケアの支援では、患者と配偶者の両方の取り組みをアセスメントすることが重要であると言える。家庭内の性役割に配慮しつつ、夫婦が責任を分担して協同したり、適切な役割分担を達成できるように支援していくことが望まれる。なお今後は、本論文で提唱した「類型モデル」や「バランスモデル」等の臨床適用の可能性を検証していく必要がある。

〈 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨 〉

日本において糖尿病は、5大疾病に数えられ、1000万人を超えるという患者数の多さ、合併症の重篤さから国を挙げての対策も多くなされている。糖尿病の9割を占める2型糖尿病は薬物療法と共に食事や運動といった日常的な習慣や行動への配慮が不可欠であり、また、糖尿病患者では抑うつ状態が生じやすいため、心理学からの研究も進展しつつある。

本研究はソーシャル・サポートや夫婦関係といった人間関係の観点から、糖尿病のセルフケアと心理的適応を検討したものである。

本研究の知見は多岐にわたるが、評価すべき第1の点は、糖尿病患者に対する新たなソーシャル・サポート尺度を作成した点にある。従来の糖尿病におけるソーシャル・サポート研究では、家族、友人など主要なサポート源を1つないし2つに限定したものであり、研究間で結果が一貫しない場合もあった。本研究で丹念な手続きを経て新たに作成した糖尿病特異的サポート尺度は、サポート源として家族・友人・同病者・医療従事者といった4種のサポートを同時に測定するものであり、これにより糖尿病患者のソーシャル・サポートを包括的にとらえることが可能となった。また、この尺度は、糖尿病患者に特有のサポートを病者自身のニーズを踏まえた形で測定するといったこれまでの尺度にない特徴を持ち、今後の活用が期待できるものである。

第2の点は、上記の尺度を用いてソーシャル・サポートが糖尿病患者のセルフケア行動に与える影響を検討し、そのプロセスの一端を明らかにした点にある。ソーシャル・サポートが糖尿病患者のセルフケア行動を促進するという研究は散見されるが、どのサポートがどういった機序で促進するのかといった点については、詳らかにならなかった。本研究では家族サポートが直接的にまた自己効力感を經由し間接的にもセルフケア行動を促進させ、ひいては血糖コントロールの指標であるHbA1cを改善させる事を示唆した。こうした影響過程を明らかにするとともに、ソーシャル・サポートの中でも家族サポートがとりわけ重要であることを指摘した点は大きな成果である。

第3の点は、糖尿病の問題を病者個人ではなく、病者とその配偶者という夫婦関係から詳細に検討した点にある。この視点自体は従来の研究にも認められるが、関係を捉える際には一般の夫婦関係や家族関係の測定尺度を用いており、また、糖尿病患者の回答のみを扱っていた。本研究では、食事療法への取り組みといった糖尿病特有の行動に絞って夫婦関係を査定し、また夫婦双方から回答を

得ることで、より実態に即したデータを扱った点で独創的である。また、これにより分類した夫婦類型により、健康指標や適応指標等が異なる結果を得、家族のサポートの中でもとりわけ配偶者サポートの重要性を指摘しえた。

このほか、詳細で幅広い先行研究の整理、各研究結果の性差に対してのジェンダーの観点からの論考、食事関連行動に対する否定的態度尺度の開発、なども評価に値する。

本研究の限界としては、対象者が主として医療機関に通院し研究参加に応じた者に限られるなど知見の一般化にやや難のある点、夫婦の食関連行動に収斂し、他の家族員との相互作用や病気に関連する多様な行動を扱いきれなかった点などが挙げられる。また、文章の冗長さなどの若干の表現上の問題がある。しかし、糖尿病患者の対人関係の領域に、独創的な視点から多角的に踏み込み、種々の知見を積み重ね、糖尿病患者の健康や適応におけるソーシャル・サポートや夫婦関係の重要性を示した点は十分な評価に値するものである。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。